



奇仙

とうとうのれやうと世帯から豆の袋 一漢
 井筒しつと子ねまのち 春来
 ねまらき詩人のねふ酔へく 梅動
 とくしつと子もまらね乃筋 吉門
 月影の夜を暈ふ輪ころも 米仲
 復のしつとねもら 露牙



五七五 神まゝりひふ世さる生
くくくく 朝の空花の多
南条のまゝは雲はなまじ
全漢文庫さくも根母
うらうらうら 竹の起る雨の後
ぬくぬく 皆酒を吐く
百目賞ふふ 緒の月たぬかり
物 路の香清縄 けり
門 伴 牙 助 来 牙 日 門

舞くも 舞あふも 世の伴ふ 牙
ゆきゆき 雨の日の日 伴
震動の海は雨の車はく 来
く 答ふも 朝の献立 助
大将の けり 早き 門
天もふはく 薄のまじ 執
執

歌仙

鶯を結ぶ中の葉をく

曲菴

炭固りしづる江南の春

春春

清輔の節の袋の草紙を

宗梅

こぼれ掃めとここ重棚を

杜陵

東の月も雨も凡縁を

百宇

けらしくくぬの朝の

百菴

小川く〜し〜ゆの生ウ 兼
 拓植の小橋を磨く〜呼入 梅
 四角〜し巨漣を〜くの上 凌
 俊名〜あては杜子実く〜 宇
 馬道法師の〜唐のあり辰 菴
 波の大地の嘗ふまのわ 来
 少灯の風あり〜花〜 梅
 ね〜らう夜〜く〜 短冊 凌

鈴持の神を〜ら〜風中 宇
 庭〜物〜ら橋の〜は 菴
 楊柳の余心〜る暮〜の月 来
 秋もあ〜の白〜り〜 梅
 伸〜る〜の〜し〜音の船 凌
 此〜り〜る〜り〜由造〜 宇
 隆子〜〜終〜わ〜ぬおら 凌
 片〜り〜る〜の醫者の〜の架 来

花のうらも標くも散るまのむ
後 後 後 後 後 後 後 後
中 中 中 中 中 中 中 中
物 物 物 物 物 物 物 物
由 由 由 由 由 由 由 由
衣 衣 衣 衣 衣 衣 衣 衣
後 後 後 後 後 後 後 後
字 字 字 字 字 字 字 字

ウ
梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅
菴 菴 菴 菴 菴 菴 菴 菴
宇 宇 宇 宇 宇 宇 宇 宇
来 来 来 来 来 来 来 来
秋 秋 秋 秋 秋 秋 秋 秋
助 助 助 助 助 助 助 助

心

まつたまはてはく見れば年々
 舟もよもく物事公法多松
 ときの中ふ真草行わく
 くくくくくくくくくくく
 陰行の白きありよ月の色
 九の宵くくく鬼打志取
 在川 春兼 梅戸 栄仲 友以 秀億

ウ
まのり又草鞋おちつての道
は白く浦の舟の香のあ
研まぐ鉞に水をぬらさ
そのわらわりの双七兵衛
悉痛く浦の舟の香のあ
お儀おくる心まじけの樽
いりのおちまじけの樽
しつて可のしつて朝貞の種
信

らちのりおちまじけの樽
側舟人おちまじけの樽
本おちまじけの樽
らちのりおちまじけの樽
きつて受取の舟の香のあ
天下晴るるもおちまじけの樽
寺お勝つた舟の香のあ
奥の舟おちまじけの樽
十月
以

賢の脱給ふあつてまゝに
にうとむのきい像お整り
まゝの時ふりてまゝに
佐原おと日だつてまゝに
はこいきふ太鼓の枝舞さう
しつとまんと犬の家お入
月しつとら松のえり
どしとあらうと秋の響
件 信 戸 件 曙漸 来

口つとりの露がまゝに
おのくともまゝに
程とれらけり
朝のうららの
三瓶子花お娘
庭とらうと
件 戸 故一 百卷 信 置明

新仙

くまのこゝろをいふに
世にけり

徳純

しるはるるをいふに
今

春来

くまのこゝろをいふに
仙

李

わきまをいふに
環

六水

まのこゝろをいふに
李

簡

まのこゝろをいふに
子

訥

情のたよりの日一日の
緒のたよりの日一日の
何のたよりの日一日の
味あつた日一日の
神のたよりの日一日の
荒れゆく日一日の
かゝる日一日の
此のたよりの日一日の

ウ
こゝろのたよりの日一日の
七重のたよりの日一日の
何のたよりの日一日の
何のたよりの日一日の
何のたよりの日一日の
何のたよりの日一日の
何のたよりの日一日の
何のたよりの日一日の

歌僊

折印らるるもこれしやうや非昔月

堵岩

園煙裏の煙さくさふら

春來

啼わげしこの粒のさうせん

堵祐

舟へ投る心跡さうせん

和專

夏の相居酒の辨をさうせん

善伴

見るも人もさ福のさうせん

巨淵

佛何豆鉢つくも也と鉢はくも
御園のうつも國をくも
しる箱の中にあかしの使斗
お八丈の般ち—あきま
常お鶴うもまき—し流—
丸太のく—くおまね吸物
南京のけりき—く二日月
行屋おねのく—伊達お大名
閣

神はる海は—うの民の禱
たる層おつ—く—く紙
可⁴おし—たのけり—く日
—く—く—く—く
余⁺おねおま^茶おひ^茶お誤^茶ぬ
わわ⁺お知⁺—く—く—く奥の公
ま⁺お餅⁺お膝⁺お袂⁺おサ⁺—く—く
使者の落馬も—害のく⁺—く

拜殿おしつゝ何の物も違
入とこりかゝるゝゝたさの山
二八月もきゝゝ味曾の大抄子
きぬ裁つ板の股きゝゝと
師直や相織よわる精の丈
窓卯とふあられかゝゝあ
猿月お掃除と食の備とむく
〜道〜蜀春の風
件 束 袂 例 子 件 例 祐

7
蟬ハの音行の申ゝ益やゝ
法蓮華經とてとあはれ
織玉子風土の〜らゝあ
あ中〜ゝゝゝゝゝゝゝ
余り也よ物地のみち部花の窓
杖の〜ゝゝゝゝゝゝゝ
執筆 専 件 例 祐

歌仙

何と取ら舟も見とて初時雨

甘谷

又一盃をこころの春

春来

梅櫻のとも根く根かたき

阿誰

脚まのゆきまをり清く也

存義

雲かひく志く月の薄る泉

連馬

こころくくと歳草をたふ

故一

六十一

山姥を中おししる糸の也
鎌の入方先鼻とくじ
親指の印とく戻る時の鐘
きくくこの胸に凍るれ門口
ほよほよ引起されく又のこ
持糸のあま^中あましも合点
いのねを落敗にせしの待乳山
馬のしりさくゆれくひ義

大君お目つゝまほくじ雨の宿馬
雛も五日の福例くはる一
どけくく道らくく石の風巾
川よまゝ人のまはくくこの
わらわら^ナ馬鞍の世入取まくく
中長を^ああまのまはくくはな
鍼^針縫ま^し生し縫ま^はは
谷屋くまら^しは^ら田^う海^ま

三條のほろろるまの
うき世に描くかきとく
山一今もを流しの鍋湯漬馬
壺屋の瓶の蓋の蓋をく
住くんよとくかきよ
あまのこまの月の大潮
冷今もを流しの伯鷄
新壺門の牙の家

五百女曼荼羅の
大路のうきとくかき
色くい番屋車もく
朝のまわりの一日も
あまのこまの流しの
ちんちんせいのつし

歌 僊

夢みのい登く空をまお月

柯木

けもも所り川はくくれ禊

春来

くく大袂わきし酒のほのく

桐君

家小久しき力らふ筋

柯調

竹馬小石とや月を振新

柯木息女
久五郎

空くくくと振る勢ひ

竹枝

十年とてかたしめしむる丹後路 竹枝
牧毒翁とていふも山嵐とて 春
花並に多事車一りあわくは 桐君
まじしあゆめいふ麻衣のしる 春茂
西行の瓦ののこもくし煙 阿洞
あひあつとて松の針 舟政
新船回とて花とて秋 春
看替とていふる風呂鋪の居 桐君

^ウ
しと秋とて多事花の味からて 舟政
ほのくしとて醫者の迹 阿洞
釘のくし奥の行くる底光 春茂
物瓶とていふけいすは枝のあ 桐君
きりぬらまのら矢八幡花の友 春
初年とていふも春とて 春
溜心

歌仙

一葉軒
一永

春雨の聲も潤ふはくく
 花渡の柳のねのつらき
 掉麻ね河の落しはくく
 ざらとみねと洗ふはくく
 主印くみわぬ一人の月の宿
 瓢くもいぢりもわり

春來
 永我
 采仲
 存義
 隣笑

蒼白く〜〜〜の見え也 立笑
晴〜〜〜の光の辨天 冲谷
空〜〜〜の急き山 山
當〜〜〜の腹の酒 義
兄〜〜〜の切封 件
元〜〜〜の周 我
藤〜〜〜の色 義
入江〜〜〜の以時 牙

牧狩の〜〜〜の我
朝雷〜〜〜の件
灯籠の〜〜〜の来
ゆ〜〜〜の義
清〜〜〜の件
張〜〜〜の件
〜〜〜の義
〜〜〜の義
〜〜〜の義

香炉の煙はりきふくつゝの
五十一石といふしる口上
ゆきゆきふくつゝの體よそ
孝山伏の鉄窓とと登ふ
増とふくつゝの葛の奥
株く月つきもじり音
かお撲のあつたの中
待とくくきく川柳の園
張

碓氷^ワの煙はりきふくつゝの
鼻と斬らしてまのし
肩衣とくつゝの酔と
ゆきゆきふくつゝの
花りくつゝの扇の
月と深く馬と膝とけ
張

歎と~~~~
わ~~~~

古
佳風

梅屋鋪淋のぬすふとくゆ社
 芥子とむらり扶ふとくゆ
 角落とむらり面の見遠下
 とくゆとあふり客の先秘も如
 捨白とくゆり実の三月月
 けふも鬼のまらりと昏
 雨

露まきこくまきしり(長りり一
とてこまき子持わたり舟ま
同帳よまきも盗人逃放一雨
は舞よりのりノニりノ三一
鼻くくくまき舟まきりの思ひま
しりまきまき替世の投馬田一雨
伽羅の捨買よりのりまきの愛る一
法国の原氏花のりまきま

月まきまきしりまきまきまき雨
黒まきまきまきまきまき入一
馬のまき福も海道まきまきま
燈まきまきまきまきまきまき日
面まきの母まきまきまきまきまき一
吹まきまきまきまきまきまき供雨
日まきまきまきまきまきまきまき
松の常盤のり同極月一

まはるのさくし丁銀のあし
よの衣の甲よき清洲永雨
紅雲の空蜻蛉を頼むるも
然の棚くくしうれ風雨
お女のさしうけりや朝の月
人小同くくしうれつま
祢田の内も常く怪我はか
くくくくくくくくくくく
一

ウ
臍付者くくくく見れ小田の鶴
お七兵衛出り宰人
夕虹のさくしうれつま
まろ水やうれつまの紋
美の反耐の面くくくく
雅子あしうれつまのさく
ま

教仙

左ねよこしと浅黄の雲の字世に

羊菴

ふれり切紙何れ月ゆよ 春来

豹の皮商人船のまきくよ 百菴

雀かつまて竹れ起や 五百

ふれ葉のまの堂六四月ふけ 百太

行りまわくまの流海石 吟洲

皆^ウまのゆる上風品ののりつゝま
わんせくして果を合合菴
あま入れば女も果る時を五
あやふいふのくらふあまら
せつらつまゆつゝはまを光る心
舞々舞々箱と火くら箱を
る飯の万里も遠く江戸の海太
ぬらふとくふんぐゝ寝る五

禪り神と向うをくま
木の膜も見る残花残月太
る花をこむぐく馬ふくを付
とあふふ餅屋一軒店
頬うらうらふふはははが、
女の杖の袖も不煉れらる
薄煙埃ふまはる葱の玉太
初年うけく丹のうら木五

新道と翹^レく^レの南風^来
は色のつらむ糟^くひも^も庵
今年備^け所^かむ^も袖^の丈^五
裏^の硯^かく^るる^も太
深^くも^も笑^ひく^るも^も夢^店
鎌^をし^て鉞^骨く^る月^来
御^前の武^をた^れも^も堯^虫
今^も相^由く^る霧^のよ^くも^も五

四^つの谷^向く^るも^もり^くる^も是^は豈^か
子^とも^もの^も處^の門^の暮^くる^も居^る
是^も亦^も換^りて^は終^る炭^俵
抑^りも^も佛^祖代^の太
ま^のの^も目^もじ^らわ^ゆの^も花^の下^洲
か^のも^も寒^さ三^月の^も味^執
業

歌仙

初年の呂頭廣一の家徳利

文里

春來

起風

長楸

祇丞

木雪

木雪

木雪

利^ワける渠^ハ心^ハむし^ハい^ハす^ハ申^ハの^ハ取^ハ 買明
 伊丹ハ酒^ハの^ハ標^ハリ^ハく^ハき^ハ保^ハ 佳節
 脇^ハ痛^ハと^ハ右^ハへ^ハま^ハり^ハし^ハけ^ハり 春集
 百^ハ万^ハと^ハふ^ハま^ハり^ハく^ハ短^ハ衣^ハ 祇衣
 海^ハ出^ハの^ハ二^ハ相^ハふ^ハり^ハの^ハも^ハど^ハる^ハ蜀^ハ纒^ハ 長柄
 と^ハま^ハり^ハの^ハ者^ハを^ハ倒^ハと^ハ出^ハ女^ハ 起風
 人^ハと^ハり^ハす^ハ蛤^ハ 登^ハと^ハの^ハ度^ハも^ハあ^ハ 木室
 手^ハ紙^ハあ^ハり^ハ一^ハ月^ハ、^ハ後^ハと^ハむ^ハ 賞の

宵^ハ来^ハ津^ハ田^ハの^ハ風^ハの^ハ心^ハほ^ハり^ハく^ハ 佳節
 く^ハも^ハま^ハり^ハい^ハく^ハか^ハれ^ハ菊^ハの^ハ一^ハ口^ハ 去来
 細^ハ解^ハく^ハ蓋^ハし^ハ匂^ハの^ハ花^ハ逢^ハ 木室
 世^ハの^ハ心^ハま^ハり^ハの^ハい^ハか^ハ替^ハりの^ハ腹^ハ 長柄
 家^ハ路^ハま^ハり^ハけ^ハり^ハけ^ハの^ハ東^ハ人^ハ 祇衣
 雀^ハま^ハり^ハく^ハま^ハり^ハ下^ハ皮^ハ 起風
 き^ハま^ハり^ハく^ハ切^ハ溜^ハ見^ハり^ハの^ハ寺^ハの^ハ窓^ハ 堂の
 高^ハの^ハま^ハり^ハく^ハ凱^ハ陣^ハの^ハ觸^ハ 佳節

湯の町廻りのみちのわ親子と
しつくりと積雪の後の株
畢九も錢ふり世をる部山
入相もささしやまの奥
此の路の跡は流れ覺わら
揚屋の年とさつさつとや
朝霞と染しき月の雲思ひ
くくくくくくくくくくくく
長柄 木室 長風 祇虫 長風 雲の 佳節 起風

^ワ湯の町廻りのみちのわ親子と
しつくりと積雪の後の株
畢九も錢ふり世をる部山
入相もささしやまの奥
此の路の跡は流れ覺わら
揚屋の年とさつさつとや
朝霞と染しき月の雲思ひ
くくくくくくくくくくくく
長柄 木室 長風 祇虫 長風 雲の 佳節 起風

四

軟仙

甘露降りぬる華のつゆは
まふし心懸けの遠く
白雲のゆくもれは
印のゆくもれは
はらの新しさを月が
関の鼓不鐘のゆくは
手鱗
春素
冥尺
金井
尺

花の香をいかにききわたりしと
今よりいかにあはれききわたりしと
昔の物もいかにあはれききわたりしと
田舎の物もいかにあはれききわたりしと
あつた物もいかにあはれききわたりしと
あつた物もいかにあはれききわたりしと
あつた物もいかにあはれききわたりしと
あつた物もいかにあはれききわたりしと
あつた物もいかにあはれききわたりしと
あつた物もいかにあはれききわたりしと

昔の物もいかにあはれききわたりしと
あつた物もいかにあはれききわたりしと
あつた物もいかにあはれききわたりしと
あつた物もいかにあはれききわたりしと
あつた物もいかにあはれききわたりしと
あつた物もいかにあはれききわたりしと
あつた物もいかにあはれききわたりしと
あつた物もいかにあはれききわたりしと
あつた物もいかにあはれききわたりしと
あつた物もいかにあはれききわたりしと

題大象

杖より鼻より唇のさへい百谷

成屋

ゆふもさわかきく日乃り

春来

るるわす魁餘やうつひん

把山

流く浸れそつうの技

六味

遠屋は燈く月乃山風

渭北

水酒の泡とらあうさく

故一

霧の肩衣寒く虹割く
 ちんからんおふくむらり
 うねりひらき標の力を捨れお味
 喰い喰ひおし一八の舟
 お威ふし投りおるるひ縄つ
 目下か人の大宮司を同お味
 廻板とまきし待たふよの山
 柁灯とまきし月時雨のま

ちんからんおふくむらり
 うねりひらき標の力を捨れお味
 喰い喰ひおし一八の舟
 お威ふし投りおるるひ縄つ
 目下か人の大宮司を同お味
 廻板とまきし待たふよの山
 柁灯とまきし月時雨のま

7
あつらひの雑草のやせり
音の向う見ゆる本曾のけし
まじりし音と五石のけし
降りと告る秋衣半のけし
水菓とくくくはるを瓶
獨下人の類く鍋出炭
沸くわや底く如く風の月
くくくくくくくくくく
味 山 一 水 一 味 小

7
一 声よあつらひの雑草のやせり
あつらひの雑草のやせり
又煙くくくくくくくくく
きくくくくくくくくくく
柳よくくくくくくくくく
わくくくくくくくくくく
味 山 一 水 一 味 小

詞仙

苔我

初暉の控と吹ぬくも
 その人のうらやまは
 船よ積車にわさるる
 春来
 春始るる
 友以
 故一
 格調

詞仙

詞仙

我宿の甘平子よもつと今 晩雨
 親の千一宿の康瓶と下 南花
 わがしらの宿よもつと今 峩山
 履物よもつと今 踏道
 男より女に宿と二日酔 栢延
 柿より梨に宿と一日酔 支以
 小舟の宿よもつと今 峩山
 夜の宿よもつと今 峩山

田舎の宿よもつと今 峩山
 桑舟の宿よもつと今 栢延
 後行の宿よもつと今 栢延
 我の宿よもつと今 峩山
 建物の宿よもつと今 南花
 旅の宿よもつと今 峩山
 地元の宿よもつと今 踏道
 又と宿よもつと今 峩山

一々あふ御座の松の並りり
 友以
 着座佛のよき小味酒
 家和
 一腰と番匠のまじ指序
 故一
 足の前くよ多割く馬
 枯潤
 橋とよあしと集しまふ
 栢庭
 三層のよき湯屋層ふこ
 南院
 霜の月と門の欠るす
 路乃
 表門門お自さくくさ
 友以

物業ハ西ふま又さあ風
 春
 多さしあゆと流の飯時
 栢庭
 ねあふむれの遠行題し
 故一
 ね業の糺くさるる定
 踏道
 街ささよふんかき花免
 窓和
 去風さくく 標人形
 曉雨

歌仙

よ〜魚舟渡り〜の〜網の上

水國

津白ゆき〜の雨衣、晴衣 春來

まの風雲、空屋の石と、はまき〜 櫻在

旅のよき〜連とや〜て 又國

今朝見よ〜の隙 江文

持露の〜ふさり〜 常仙

中ウくふ平ヒの女メ行ユくク 五ヒ隼
 大十能トとシとシとシとシとシ 渭ノ
 盗人の使者と女メとシとシとシ 去マ
 進ノのシとシとシとシとシ 江ノ又
 とシとシとシとシとシとシ 常ノ心
 黒い男ノとシとシとシとシ 撰ノ居
 塗ノ後ノおシのシとシとシ 文ノ玉
 香ノのシとシとシとシとシ 一ノ年 五ノ隼

砂の月ノ小ノ朝ノの中ノのシとシとシ 渭ノ水
 信ノ同ノがシりりとシとシ 村ノ名ノをシとシ
 ちノとシとシとシとシとシとシ 五ノ隼
 膝ノのシ車ノのシとシとシとシ 去マ
 親ノもシとシとシとシとシとシ 江ノ又
 とシとシとシとシとシとシ 去マ
 去マのシとシとシとシとシ 撰ノ居
 去マのシとシとシとシとシ 渭ノ水

大坂の〜
 秋の日は〜
 暖れ人々〜
 柄杓き〜
 月のけ〜
 赤く錆〜
 拂う次〜
 口〜

常仙
 五地
 葉
 汀文
 堂
 撫
 小
 馬

仁玉の〜
 仰々〜
 一〜
 余の〜
 花の〜
 解も〜

撫
 五
 溜
 委
 行
 小

弁山

ゆきの骨握きの松の葉外
朝霧のうらうらと鳴れ山陰
本箱の雪の角は又雪のうら
谷のうらうらと友と成ら
らんはく木端の花と三月の月
都のあもめとひけら

鶴歩

春来

杉風

三鱗

栢筵

畔水

ほり錦の蝶々散ゆる福寿山 縣
酒とあてての館の目こま 造
去るのしるしをた踏ぬれ 来
大師の又小吉の墨いろ 風
飼猪と近付お威の降のり あり
まきの遙きささきしく覺しり 縣
此節をさくせといひ薄月夜 丘阿
目も見るやふ尖る秋風 風

白川の園のふけをぬりし 来
つゝ杯のりさくすもんをせ あり
喚わさくさるの権藉しきり あり
見よこの奇蘇が鳥賦のすゑ壘 縣
ナ
千はゆく六浦の牛の嶋消 あり
まのまのくぬまをわくる日 あり
片ゆきまきこ地付く蟹の乾 風
これも旅の杖の赤土 造

あつたつたの言ふはさう
あつたつたの言ふはさう
あつたつたの言ふはさう
あつたつたの言ふはさう
あつたつたの言ふはさう
あつたつたの言ふはさう
あつたつたの言ふはさう
あつたつたの言ふはさう
あつたつたの言ふはさう
あつたつたの言ふはさう

あつたつたの言ふはさう
あつたつたの言ふはさう
あつたつたの言ふはさう
あつたつたの言ふはさう
あつたつたの言ふはさう
あつたつたの言ふはさう
あつたつたの言ふはさう
あつたつたの言ふはさう
あつたつたの言ふはさう
あつたつたの言ふはさう

歌仙

其音の真なりける礎の卯

李喬

月見小袖の原をめぐりて

春菜

春や〜葉や梅〜枝あり

柳江

少ら〜ひのさう一人りきさら

詠子

親船〜つたつけるあつよ

友以

蟹のお中つめし〜るし〜る

栢筵

竹^ヲ様の揚奴つゝつゝ朝朝 百宇
 きつゝ醍醐のつゝ糸らゝ 百嶽
 江戶校箱かゝゝ 妻
 孫の乳母且ぬの乳母のまふ入と 友以
 惣もいぬがけつゝはきて居る 池子
 饅頭もつゝお別建して片方の 百嶽
 つゝこのつゝおまゝつゝ切る 柳仁

妻の月巨燧もゆき灰くらふ 柏延
 埃七代つゝ傳奏のありと 妻
 見つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ 百宇
 蜂つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ 池子
 音ぬつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ 柳仁
 四方つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ 百嶽
 葉の向つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ 柏延
 可^ナ査の推つゝつゝつゝつゝつゝつゝ 百宇

百宇

着い〜く大工い〜を凌ぎは〜 友以
室橋崎〜肝つ〜を連れ 油子
い〜のり〜つ〜橋の継ぎはる 妻
羽織〜の〜醫者の曙 柳江
う〜の〜盤と〜の〜鏡世音 百蔵
伊物の〜を〜眼鏡と〜何 友以
と〜の〜月つ〜る空 油子
あ〜の〜鶏の首 妻

中洲靈子家の袴のぬき所 百字
口紅粘つ〜〜夫大黒 栢庭
是見え〜〜八十八のふりひ筆 柳白
椽〜〜の〜つ〜け紐 油子
るる紫腕替しを也通担神 百蔵
もが〜〜の〜蓋〜る 友以

奇儂

系よりき清雲のけり長吟
白くしりさたの翳るる海
朝の月も棟上の穂もあそく
夜もふ呼ぶ声もあそく
わきま自利れ人あそく
敵の口切く守まゆく夏

超波

春來

玉蟻

買明

百太

祇丞

蛇の中 玉作
文の結くまきくくくく
まの曲のまきくくくく
のくくくくくくくく
かまのくくくくくくく
風の葉のまきくくく
まのくくくくくくく
川崎のくく馬蹄 玉作

杖のくくくくくく
萱の葉のまきくくく
秋のくくくくくく
天の教の風爐のくく
まのくくくくくく
去和布のくくくく
切のくくくくくく
又貴の及まきくく

玉作

橋のまゝに揚金十と物 祇也
お蔵と心むいりしと 舟
舟とる形を禱おはしと 舟
きしとるの麻鳥太と 祇也
けあのおと踏と馳まか 溜水
いりるんが群ふり 玉機
川くわし律風か坊お月高し 堂の
葉のさびくま葉のつ桶 妻

何と云ふも舟とて可なり 玉機
とるれくま塩賣の積 祇也
船鳥尾おしとる風子 舟
何と云ふも高兼寺山 堂の
とるれくま流る橋とら 妻
川くわしとる獨ぼおはし 溜水

獨吟三千句卷頭

古

青岬

寒梅や萬葉の影

春來

冬三千句のあり

存義

酒瓶の底を遠くまで

溜北

ひきけしもの破き傘

采仲

川舟の通きし月入

義

袂りやくと五位の死

リ
まのなるほつと此のわらびさ
流よぢく糸をちりちり徒歩
物賣の店に寝ひのわら女小
名も賢黒れ昔ころころ
朝靴の糞よぬかすけぬきて
かるう卵よ遊ぶあ及小
深川の正直坊といふ遊むる
情しなくお福控し見給義

于海苔の助炭お月のまじり
奇つら陣まのわらわの借錢
松鐘もむく尾上の掻うす
碓つりあふお山山
帝政ころころ眼病のまじり
お物店や一年以内乃去
体丸太肩をころころ頼む
人のころころも寛永の辰義

頃をわたりてのしるし
黒い葉の目しるし
さしゆく梅のしるし
田のゆく舟のしるし
風流の家も杖はく月のあ
又よりかかたれはる夜に
人音のしるし
舟のしるし
義

ウ
焚く煙ゆるく
しるし
雨絞る踏も小柄と件
あし
まの海見
満ちるしるし
東
件

百韻

日乃橋標園の東れく門處

春來

糸くくひきとびくさきの官 龍眠

毛虫の巢芽も去風の木の候小月

旅く貫目れ長待り遠ふ未

る散る二間の雪やうぬ一円

獨くらしげら落月中る下眠

木樨の香も白くももる臭さ 同
 赤葉もももぬるふ氣わり 来
 冠衝くや〜も前頭 眠
 紅の文を帯つ羨むんや 来
 び〜昔の姿まゝ土山 同
 揃ふ柏の葉もももり筋 眠
 例ぬ陶も越た橋部ら 同
 おま〜つひ名聞とら 来

ぬけいあると花の舎の肘伸る 眠
 ねむつ〜も藤の文 飯 来
 腰の豫拾つ〜雉の尾も 眠
 従来〜の末いぬのけ 来
 〜〜〜ゆ傳も〜け 眠
 屋空と拂ふ〜本風の 来
 清風写月の心〜 同
 亭〜二名月客〜初 眠

び〜雨〜し〜し〜粟以 同
夢中の夜行はなう〜と 来
奈ふの神〜さ〜蛇の救 同
既〜う〜人の我牙〜ら 眠
取替〜新〜あ〜助〜く〜と〜 来
松の旭やも〜あ〜い〜く〜 眠
鼻の黒い〜人〜と〜清〜真〜い〜さ〜ら 来
胡〜の〜ゆ〜と〜あ〜と〜あ〜あ〜 同

〜し〜〜家落〜ら〜友の橋 眠
駕の差路〜い〜ま〜世〜可〜い〜と〜 来
月〜き〜〜花〜亮〜燈〜は〜掌 眠
か〜く〜博士〜は〜ら〜な〜あ〜と〜い〜向 同
は〜し〜〜い〜世〜は〜ら〜と〜い〜る〜國の音 同
朝〜く〜と〜い〜お〜普門〜は〜あ〜は〜 同
い〜世〜の〜高利の鬼の責〜ら〜は〜 来
階子の〜の〜い〜あ〜の〜環 同

地打りふと登り小坂郭云日
はくさくさう中降る夕
朝風よとさぬ風うかた
糸わらわら道を散り少
きくさくさう怒お似るさ
質しらふさう海もる月
らくさくさう六給あは
湯くさくさう醫の家のは
眠 来 眠 来 眠 来 眠

あわしの祠はうひおきかま
藤深のさうたは鳥かた原日
りや晴るく日のあふんくさう
まらぬあやう腰うけ
川並う宿は浮巢の浮長屋日
百方さう行は向こ
しんらふ鸚鵡はうさう日
今しか町ちとねさうける
来

風俗を習一壺のまじりて
 朝身おのりわくまじりて
 何者の物倒れらるじりて
 大つまじりてもく半時の天日
 梅くらむ九曜に糸猿取らしりて
 竹のるりてまじりて
 まじりてまじりての尾も見して
 壺のまじりてはまじりて
 眠

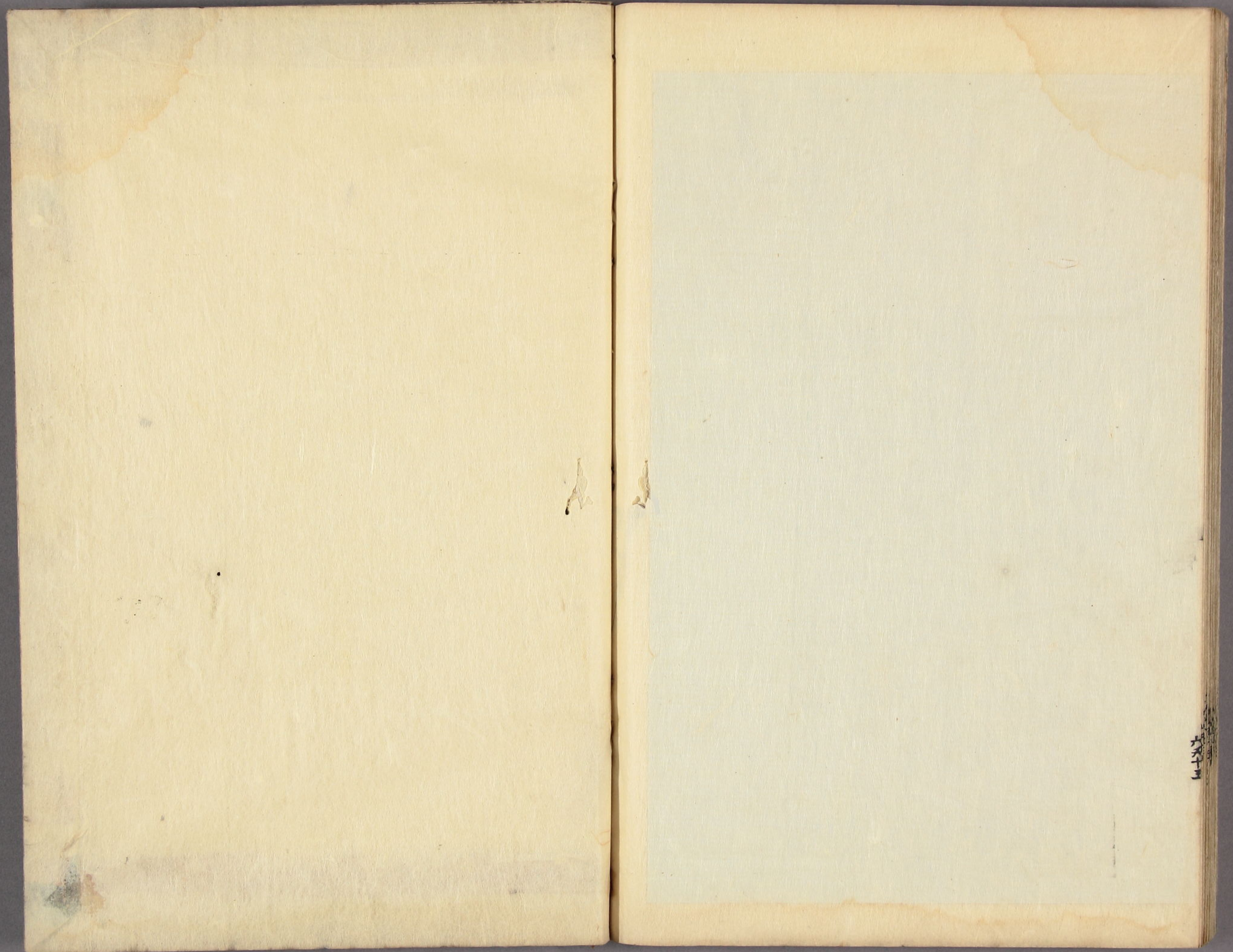
おのの目じ食へ公四食ゆく
 やくまじりてあま相もく
 生美味習らるく松の命ゆ
 一本のまじりてまじりて
 細青お祖堂の額の見らる
 牛の浦まじり牡丹のまじり
 夕のまじりて雪後のまじり
 皆まじりて金次城のまじり
 眠

よのまきよ女おぼはる積るれり眠
保氏くく心銀香のくさ日
躍くく躍くく心とたかこと
帰月高く大歌を演眠
うたお東野州のくさきて
焼くくくくくくくくくくく
薄くくくくくくくくくくく
曇くくくくくくくくくくく

名
くくくくくくくくくくくく
事くくくくくくくくくく
碑くくくくくくくくくく
前くくくくくくくくくく
情くくくくくくくくくく
坊くくくくくくくくくく
流れ女くくくくくくくく
くくくくくくくくくく

枝炭の鉦の音とくけりしるを 眠
仲夏にわい清き糸繫 来
月夜にぬき粟うりし権かりと 同
余念しつらもむま秋の所 眠
道のつらわきし酒おろつ溜し 同
緒ともむねを肩のけり合 来
二膳まじりぬりぬ小役人 眠
金一升をぬ奥津鳴山 来

けりしるを糸繫むる膝を 同
歌のつらわきし酒おろつ溜し 眠
よの甲とむねのよしつら 来
苗代二寸とむねの月り 同
竜宮も高葉も真とためて 眠
吟やもむねのよしつら 同



100

